

その他、天竜川周辺で見られるネズミの仲間 (ネズミ目ネズミ科)

家ネズミ (ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ)

家ネズミと言われるものにドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミの3種類があります。これらは古来から人間と生活を共にしており、主に住居やその周辺に生息するほか、森林や草地などにも生息しています。その結果、人間の分布の広がりと共に世界中に広がっていきました。

これらの3種類のネズミは、今回の調査では確認できませんでした。水辺を好むドブネズミは周辺の路上などで目撃されていることなどから、おそらく河川敷にも生息しているものと思われる。



ドブネズミ (撮影：澤島拓夫)
頭胴長110~280mm、尾長175~220mm、後足長27~42mm、体重40~500g。主に下水、台所の流し、ゴミ捨て場、地下街など水が摂取できる湿った場所に生息。主に夜行性。動物質をよく食べる。繁殖期は春が中心で、平均8~9頭を産む。

●生活環境に適した体の構造

ドブネズミは体が非常に大きく、大きな個体では体重が500gを超すこともあります。これは日本の野ネズミとしては比較的大型であるアカネズミの10倍以上の体重です。ふつうは地中に巣穴を掘り、建物の下や下水道の周り、地表などで活動します。

一方、クマネズミはドブネズミよりも小型で、ドブネズミに比べて高いところで活動することが多く、天井裏で走り回っているネズミの多くは、このネズミです。手足の裏側にヒダの発達した肉球を持ち、これが滑り止めの役割を持つためパイプや壁を上手に登ります。特に、雑居ビルなどには餌場や隠れ場がたくさんあり、冬でも温かいことから一年中盛んに繁殖します。

ハツカネズミは体重15g前後の小型のネズミで、ヒメネズミより少し小さいぐらいの大きさです。草地に隣接する家や水田付近の家の倉庫や蔵でよく見られます。また、飼料倉庫や穀物倉庫にも多く、このような場所では主に穀物を食べ、草原や耕作地に生息するものは種子などを食べています。ハツカネズミは腎臓の働きがすぐれているため、水分を再吸収して濃い尿を作ることができます。このことから渇きに強く、飲み水のない倉庫やコンテナ内でも長期間生きることができ、コンテナや積荷に紛れて海外から移動してくることもあるようです。

コラム モグラのトンネルは地下のアパートメント？

畑や牧草地では、いたるところにモグラの掘った坑道やモグラ塚が見られます。このような坑道は、実はモグラ以外にもいろいろな動物が利用しています。モグラの坑道はどのように利用されているのでしょうか？

赤外線センサーカメラを使って調べたところ、コウベモグラの他にハタネズミ、ドブネズミ、ジネズミが利用していることがわかりました。ハタネズミやドブネズミは自分で巣穴を掘ることもできますが、モグラのように土を掘るための頑丈な手を持たない動物にとって、モグラの掘ったトンネルは生活空間を広げるために好都合なのでしょう。

コウベモグラは完全に地下性で、ミミズなどの地中の生き物を餌としています。一方、ハタネズミやジネズミ、ドブネズミは半地下性で、地表面の近くで主に活動します。ハタネズミは主に植物質のものを、ジネズミは昆虫類、ドブネズミは雑食性で、それぞれ異なる資源を餌としています。モグラの坑道をネズミが利用することにより、双方にどのような損益が生じているのかはわかりませんが、別の資源を餌とすることにより資源をめぐる競争が起こらないため、同じ場所での生活が可能になっていると考えられます。



コウベモグラ



ハタネズミ



ドブネズミ



ジネズミ

(撮影：澤島拓夫)

キツネ (ネコ目イヌ科)

北海道、本州、四国、九州など広く分布しますが、四国や佐渡では少ないようです。北海道のものをキタキツネ、本州以南をホンドキツネと亜種で区別することもあります。

背面は赤褐色で、アゴの下から腹部にかけては白色の毛で覆われます。

●キツネは人をだます？

キツネは日本人の生活や信仰と密接に結びついています。五穀豊穡を司る農耕神、豊漁を願う漁業神、商売繁盛を願う商業神、また、土地の神・鎮守としても崇敬されました。全国各地にある稲荷神社の境内にはキツネの石像が御神使として祀られていますし、近世の集落では耕地を見下ろす丘に狐塚を設けて供物を供える習慣や、新年のはじめにその年の豊凶を占う「寒施行」の行事など、近年まで民間信仰として定着していました。

古代・中世には、キツネを妻とした家系の子孫が人並みはずれた能力を発揮する話が見られます。その一つに、説教節(唱導芸能の一つ)の「信太妻」の伝説があります。村上天皇の時代、安部保名という人物が雌キツネを助けたところ、そのキツネが美しい女性となって訪れ妻となり、子を産み育てます。ところが障子に映った影がキツネなのを子供に見られ、正体を現して去ります。その子は、のちに陰陽師安部晴明として天下に知られる人になったというものです。

一方で、キツネが家畜を害し、また、中国から「キツネは女に化けて男を惑わす」という話が民衆にも浸透するにつれ、ずる賢い恐ろしいイメージが成長し、「キツネは人を化



キツネ (撮影：石原 誠)
頭胴長60~75cm、尾長40cm、体重4~7kg。野ネズミ類、鳥類、大型昆虫類などを主に捕食するが果実類も食べる。春先の3~4月に平均4頭の仔を巣穴で出産し、夏まで家族群で生活する。



キツネのフン

かす、人に取り憑く」という話が広まりました。

●草地を好む生活

キツネは、森林の間に草地が開けている環境を好みます。イヌと同様、目立つところにフンをしたり、小便を引っかけたりして自分のテリトリーをアピールします。

主な餌は、ネズミ、モグラなどの小型哺乳類やオサムシ、コガネムシ、バッタなどの大型昆虫ですが、ほかに果実類やトウモロコシ、家畜の死体や人家のゴミなども食べるようです。ネズミを襲うときは、高く飛び上がって上から捕まえます。また、カラスなどを捕まえるときは、近くへ寄って死んだふりをし、鳥が近寄ってくるとパッと飛びかかります。

キツネのフンはイヌのフンに姿・形がそっくりですが、フンの中にネズミやモグラの短く黒っぽい毛と小さな骨がぎっしり詰まっていることが多く見られます。また、柿の種やコガネムシなどの甲虫の翅などを含んでいることもあります。

●天竜川での確認状況

天竜川の河川敷には、堤防や河原の草地に生息するネズミやモグラ類を狙って来ていると考えられます。また、喉を潤しに来たのか、それとも岸辺に打ち上げられた生ゴミでも期待してでしょうか、水辺に沿ってキツネの足跡が転々としているのが見られました。キツネは比較的開けた草地で餌を探ることが多く、歩行の仕方も直線的です。畑や雪の上に残った足跡を追っていくと、キツネがスタスタと歩いては、草むらなどに鼻面を突っ込んでクンクンと臭いを嗅ぎ、またスタスタと歩く、ということを繰り返している様子が見て取れます。天竜川の調査では、夜に、強力な懐中電灯で照らしながら、堤防を静かに車を走らせて、堤防周辺をうろついている姿を確認することができました。



キツネの足跡：等間隔で並んでいる



巣穴：直径20~30cmで、斜面に水平に掘る。繁殖のためだけに利用。長年使われると、いくつもの穴がつながり迷路状になる。

タヌキ (ネコ目イヌ科)

広く北海道、本州、四国、九州および周辺の島々に生息します。

タヌキは、イヌの仲間では原始的な形態を持ち、特徴的な姿・形をしています。

雑食性で、カキ、マメガキ、クワ、ケンボナシなどの果実類や、ネズミ、カエル、コガネムシなど甲虫類、ミミズなど土壌動物を食べます。



タヌキ

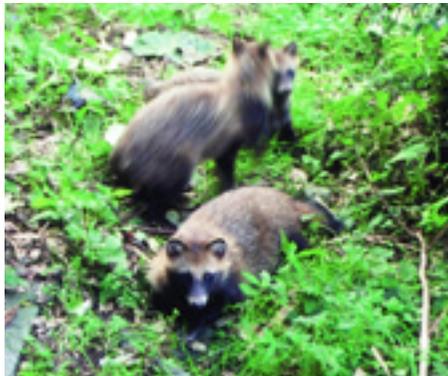
頭胴長50~60cm、尾長15cm、体重3~5kg。郊外の住宅地周辺から山地まで広く生息。鳥類、野ネズミ類、昆虫、果実類などを採食するが、ミミズなど土壌動物の採食量も多い。親子または家族が近い距離に集まり生活。春に3~5頭を出産。

●童謡に多く出る動物

日本の昔話によく出てくる哺乳類はキツネですが、童謡などにはタヌキが多く出てきます。特に、「証誠寺の狸囃」、「てまり唄」（あんたがたどこさ肥後さ 肥後どこさ 熊本さ 熊本どこさ 船場さ 船場山には 狸がおってさ…）、「手合わせ唄」（げんこつ山の狸さん オッパイのんで ねんねして…）などは有名です。タヌキは、このように童謡に唄われるほど親しみのある動物なのでしょう。また、化ける話にしても「文福茶釜」に化けて火の上に置かれ、「熱い、熱い」といって尻尾だけ出して逃げたり、小僧さんに磨かれて「痛い」と言ったりするようなヘマをする動物として扱われています。

一方で、童話「カチカチ山」では、タヌキは人間に悪いことをしてウサギに敵討ちされますし、「タヌキ寝入り」「タヌキ親父」「ふるダヌキ」「同じ穴のムジナ」あるいは「捕らぬ狸の皮算用」などの言葉は、どれも良い意味で使われません。

このように悪者扱いされるのは、その体つきと臆病な性質に原因があるように思われます。驚くと気絶し、油断している隙を見て逃げ出す習性は、いかにも意識して欺くように見えるので、ずる賢く人をだますというように言われたのでしょう。また、顔つきも目の周りが黒く、ずんぐりした体つきと緩慢な動作が、人間の場合に当てはめて言われるようになったようです。ちなみに、酒



人家の軒先で遊ぶ子ダヌキ

瓶と通帳を持ち、笠を被った「酒買いタヌキ」像は、小僧に化けてお酒を買いに来た子ダヌキにお酒を売ると幸運になるという話から、福・富を授かる招き猫のように料理屋や食堂入口に置くようになったということです。

●タヌキの溜めفن

タヌキは溜めفنをすることでも知られます。溜めفن場以外では芬をしないわけではありませんが、溜め芬をする動物は限られているため、溜め芬は、そこにタヌキが生息することを知らせてくれます。また、その芬を注意深く観察することにより、タヌキが何を食べているのか、ある程度知ることができます。溜め芬は、1個体のものではなく、数個体が同じ溜め芬場を利用することがあります。この地域では今何が食べ頃なのか、新しく入ってきた個体がいるとか、芬を通してタヌキ同士の様々な情報交換も行われているのでしょうか。



タヌキのため芬：ケンボナシの種を多く含んでいた

●天竜川での確認状況

天竜川の河川敷では、タヌキの足跡や芬を多数確認しました。しかし、タヌキの巣穴は見つけることができませんでした（タヌキは、巣穴として岩穴などのほか、アナグマやキツネの巣穴を利用することがあります）。このことから、天竜川の河川敷を訪れるタヌキの多くは、河川敷の外からやってきたものと考えられます。

天竜川の両側には道路が走っています。タヌキなどの動物の多くは、山間部に生息していますから、天竜川の水辺にたどり着くためには、道路を横断しなくてはなりません。このため、タヌキの道路での事故死が毎年起きています。近年、道路の下に野生動物が通るためのトンネルを設ける工夫がなされる例が出てきました。こうした通路が効果的に配置されるようになれば、道路で事故死する野生動物をもっと少なくすることができるようになるのではないかと思います。



水辺に残されたタヌキの足跡

テン (ネコ目イタチ科)



テン

頭胴長45cm、尾長19cm、体重1.1~1.5kg。森林を中心に生息。ネズミ類、鳥類、両生爬虫類の他、昆虫類や果実類も採食。単独生活。交尾は夏で翌春4~5月に2~4頭の仔を樹洞などで産む。

本州、四国、九州、淡路島などに分布します。

毛の色が夏と冬とで異なり、夏は黄色がかった褐色で、顔から額にかけてと四肢が黒く、尾の先は白色、喉から胸にかけて淡い黄色をしています。冬は顔から額にかけての部分の白色が変わり、四肢の黒い部分を除いて全身黄色になります。

●果物好きのハンター

テンというと、深山に生息する珍しい生き物というイメージを持つ方も多いと思いますが、伊那谷では、身近な山や山麓部にも現れ、さほど珍しくはありません。

テンは雑食性で、イタチ科の中では植物質の餌を多くとります。特に、果実類には目がないようで、里山ではカキやクワの種子が含まれたフンを見ることが多く、人里から離れたところでは、サルナシ、アケビなどの種子が多く含まれます。フン全体が種子だけで構成されていることも珍しくありません。それも、一種類か二種類の種子だけが含まれ、同じものを大量に食べているようです。しかし、果実のない季



テンのフン (カキの種が混じる)

節や場所では、ネズミやノウサギなどの毛や骨がフンの中に含まれるようになります。フンの色は、植物質を食べたときは黄褐色かうす緑で、動物質を食べたときは黒っぽい色をしています。

水辺は小動物が多く生息する場所であり、テンも盛んに利用します。しかし、天竜川周辺は、テンの生息地である山地との間が道路や耕地、住宅地により分断されている地域が多く、テンにとっては近づきたい場所になりつつあるようで、あまり多く見られる動物ではありません。



雪の上のテンの足跡

●木登りの名手

テンは、主に地上で生活し、広い行動範囲を持ちますが、木登りが非常に上手です。細長い身体と強力な爪と柔らかくて幅広の足を利用して、垂直な木でもスルスルと登っていきますし、降りるときも頭を下にして一気に降りてきます。木から木へ枝渡りすることもできます。そのため、リス、ムササビ、モモンガなど樹上で生活している種にとっては天敵となっています。

●フンでなわばりを決める

テンはよく動き回ります。どこにでも休む場所が必要なのか、樹洞のある木の種類を選ばないだけでなく、アナグマなどの巣穴で休むこともあります。行動する場所の広さはほとんど決まっているようで、その「なわばり」の印づけに自分のフンを利用します。このため、よく利用されるけもの道を見つけることができれば、比較的簡単にこのようなフンに出会うことができます。

山道を歩いていると、大きな石の上などに長さ4cmほどで太さ1.5cmほど

の、一方が太くて反対のほうの細い、ソーセージ型のフンを見ることがあります。それはテンのフンで、目立つところにフンをして「なわばり」を宣言しているのです。このような習性はキツネなどにも見られ、サインポストと呼ばれています。



ニホンジカの死体に向かうテンの足跡

イタチ (ネコ目イタチ科)

本州、四国、九州とその周辺の島々に分布します。北海道には、明治の初めに移入され、現在ではほぼ全域に生息します。

全身山吹色で、額中央部から鼻にかけて濃褐色の斑紋があります。

主に夜に活動し、木の根元や崖の洞などを住みかにしています。

●水辺を好む小さなハンター

イタチは天竜川河川敷で多く見られた哺乳類の1種で、ネズミやカエル、魚、昆虫など様々な小動物を餌にします。天竜川の河川敷には、ネズミやモグラ類が豊富に生息していますし、氾濫原などの池や小川にはカエルや魚が多く見られます。このため、天竜川の河川敷にある池や小川では足跡やフンをあちこちで見ることができました。天竜川の水辺環境は、イタチにとって、獲物が豊富に存在する重要な餌場になっていると考えられます。

●イタチの餌探し

細長い体は、穴の中に生息するネズミ類を捕食するのに適しています。また、泳ぎも得意で魚を上手に捕まえます。魚を狙って養魚場にも姿を見せることもあります。

イタチには、穴があると首を突っ込んでみるという習性があります。中の臭いをかいでネズミの気配を伺っているのでしょうか。雪の上の足跡を見ると、木の根元などあちこちにある穴という穴を探って渡り歩いている様子が見てとれます。



夜、餌を探しに来たイタチ

頭胴長：オス27～37cm、メス16～25cm。尾長：オス12～16cm、メス7～9cm。メスは一定の行動圏をもち、土穴などを巣とする。カエル、ネズミ類、鳥類、昆虫類の他、水に入り甲殻類や小魚を捕食することも多い。平均3～5頭の仔を産む。



増水後に見られたイタチの足跡

●ニホンイタチとチョウセンイタチ

本州に生息するイタチには、在来種であるニホンイタチと移入種であるチョウセンイタチがいます。チョウセンイタチは、日本では対馬のみに生息していましたが、現在では富山ー長野ー愛知以西の地域で見られます。両者は大変よく似た外見をしています。小柄なニホンイタチに比べるとチョウセンイタチは大きな体をしています。チョウセンイタチとニホンイタチの両方が生息する地域では都市部と平野部の農漁村にチョウセンイタチが分布し、山間部にニホンイタチが生息すると言われます。現在、天竜川ではニホンイタチのみが見られますが、今後、チョウセンイタチが侵入してくるかもしれません。

●イタチの最後っ屁 (さいごっぺ)

キツネやタヌキは、それぞれ昔話や童謡によく出ていましたが、イタチは「ことわざ」によく出てくる動物です。よく知られているものには、「イタチごっこ」「イタチの最後っ屁」「イタチのもち引き」などがあります。

「イタチごっこ」は、イタチが二匹で上になり下になり、ということを繰り返しやることもあり、話し合いなどで同じことを繰り返している場合に使います。また、子供が二人でかわるがわる相手の手の甲をつねる遊びも「イタチごっこ」といいます。

「イタチの最後っ屁」は、追いつめられて困ったときに、最後の手段として相手がどうにもならないくらい困ることを言うのですが、イタチを捕まえたり追いつめたりした際に、イタチが苦し紛れに強烈な臭いのおならをして、敵から逃れようとします。これは肛門の両側にある一対の臭腺から強い臭いの黄色い液体を分泌することによるものです。これは、イタチだけが持つものではなく、イタチ科の動物、すなわちテン・オコジョ・イイズナ・カワウソ・アナグマなどの動物に共通に見られます。イタチの最後っ屁は、まともに嗅ぐとかなり強烈な臭いですが、かといって、私たち人間が目や鼻を回したり、気絶するほど強烈な臭いではありません。ただし、イヌなどのように臭いに敏感な動物にとっては、十分な効果があると思われます。

イタチには、獲物に出会うと手当たり次第殺してしまう習性があります。しかも、殺したものを全部食べるのではなく、1箇所にとめて積んでおく癖があります。さらに、自分が必要でないもの（動物食ですから、餅とか干し芋などは食べないので必要ないのに）まで集めるので、そういう癖を人間に当てはめて「イタチのもち引き」というのだそうです。



河原に出てきたイタチ

ハクビシン (ネコ目ジャコウネコ科)



ハクビシン (撮影：石原 誠)
頭胴長61～66cm、尾長40cm、体重3kg。山地帯下部から集落周辺に生息。樹上をよく利用する。鳥類とその卵、昆虫類、果実類を採食。出産は初夏～秋

北海道から九州まで、各地で生息が確認されていますが、分布域は連続しません。ハクビシン（白鼻芯）という名前の通り、白い鼻筋と目の下の白い斑紋が特徴的です。日本に野生状態で生息するジャコウネコ科の哺乳類は、このハクビシンとマンガース（沖縄と奄美大島に生息）が挙げられます。

●都市部にも進出

雑食性で、昆虫類やトカゲ、鳥類とその卵、果実などを食べますが、果物が大好きで、木にもよく登ります。水辺で採餌することもあるようで、天竜川の調査でも、水辺の泥の上にハクビシンの足跡が残されていました。平地から山地にかけての里山的環境を好むようですが、都市部にも住みついています。自分で巣穴を掘らず、岩穴、樹洞、古い炭焼窯、人家の天井裏や縁の下などをねぐらに利用します。

短足で、木登りに適した体つきをしています。短い足でチョコチョコ歩き、あまり敏捷とはいえません。そのためでしょうか、道路で事故死しているのをよく見かけます。



水辺に残されたハクビシンの足跡
指が5本で、人の足跡に似た形が特徴的。

●天然記念物に指定されていたハクビシン

ハクビシンは昔から日本にいた動物ではなく、移入種であるという説が有力です。ジャコウネコ科の動物は、東南アジア大陸部から中国南部、スマトラ、ボルネオなどに広く分布する南方系の動物です。東南アジアではペットとして売られており、それらを船のマスクットにしている船員は多いそうです。そのため、南方に遠洋漁業で出かけた人



河原で餌を探すハクビシン

たちにより持ち込まれ、家で飼育されていたのが、逃げ出して野生化したと考えられます。また、日本では、当初、昭和18年（1943）に静岡県浜名郡で捕獲されたのが最初の記録とされました。ハクビシンの名前が突如として現れたのです。しかし、確かな記録としては残っていませんが、それ以前からハクモウテン（白毛貂）、タイワンタヌキ（台湾狸）、ライジウ（雷獣）などの名で輸入され、飼育されていたようです。

野生化したハクビシンが繁殖して次第に増え、目立つようになって、確認地域が増えていったのは1950年代です。当時としては珍しい生き物でしたから、山梨県では昭和32年（1957）に、長野県では昭和50年（1975）に県の天然記念物に指定しました。

長野県では、当初下伊那の南部で見られるのみで、珍獣扱いされました。しかし、それ以降、どんどん分布が北上していき、現在、伊那谷ではふつうに見られるばかりか、果樹・トウモロコシにハクビシンによる被害が続出し、昭和57年（1982）には、清内路村・阿智村・松川町・中川村で有害鳥獣駆除の対象となりました。さらに長野県の天然記念物としての扱いも、生息数の増加を理由として平成7年（1995）に解除されました。



倒木の上を歩くハクビシン
歩行中はかかととはつかないが、足の裏をべたべたとつける蹠行性である。

イノシシ (ウシ目イノシシ科)



イノシシ (撮影：石原 誠)
 頭胴長110～160cm、肩高60～80cm、体重50～150kg。常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、里山の二次林、低山帯と隣接する水田や農耕地、平野部などに生息。雑食性で、地表から地中にかけて各種の植物・動物を掘り起こして採食。出産期は春から秋で、通常年1回。平均5頭の仔を産む。

イノシシはアジアからヨーロッパにかけて広く分布し、20種ほどの亜種に分けられます。このうち日本には、本州、四国、九州を中心にニホンイノシシ、奄美、沖縄にリュウキュウイノシシがいます。雪に弱く、今は東北、北陸地方には分布していませんが、本州北端の青森県では明治10年頃まで生息していました。滅びた直接の原因は狩猟で、間接の原因は雪と流行病（豚コレラ）と言われています。

多産で、繁殖力も強いいため狩猟の対象として長い歴史があり、本来昼行性ですが、二次的に夜行性を示します。

●雑食性の大型獣

イノシシは雑食性です。鼻を使って土を掘り、クズやヤマイモの根茎やタケノコを食べた跡は、馬を使って耕したようになるため馬耕痕とも呼ばれます。林内で落ち葉を鼻で引っかき回してミミズを食べたり、水辺を訪れて、カエルやヘビなどを捕えて食べることもあります。イノシシは、シカやカモシカのような反芻胃を持ちません。そのため、餌にな



馬耕痕

るものは、私たち人間が食べることのできるものが多いのです。イノシシが豊富に存在している土地は、人間が食べるものもたくさんある、肥沃で豊かな土地であるということが出来ます。

森林性の動物であるため、山地森林から分断されている天竜川の河川敷ではあまり見られません。しかし、水辺にはイノシシの餌となるような植物や小動物が豊富に見られるため、森林が河川敷まで連続または近接している地区では、天竜川まで降りてくることもあると思われます。

●人との関わり

イノシシは、古くから山間地域の人間の生活に良くも悪くも関わってきました。全国的に農作物被害を出す動物として悪名が高い一方で、ポタン鍋やイノシシ鍋が郷土料理として好んで食べられている地域もあります。

近年、その分布を拡大させ、特に中山間地では深刻な農業被害を発生させるようになってきています。これが農家の営農意欲を減退させ、過疎化を促進させているという人もいます。イノシシによる被害は、人間が農業を始めたときにその起源を遡ることができます。かつては、イノシシの被害によって3千人もの餓死者が出たこともあったようですが、甚大な被害は農業政策が大きく転換した際に発生する傾向が見られますから、人災と捉えることができるかもしれません。

昔はイノシシによる被害を防ぐために、シシ脅しを設置したり、石や土を積み上げて猪垣・猪土手を築いたり、油の付いた衣服をつり下げたり、案山子を立てたり、畑の脇に小屋を造って寝ずの番をするなど、さまざまな手段を用いてきました。現在では、これらに替わって電気柵が普及し、効果を発揮していますが、大きく成長した植物体が電線に触れて電流が切れるなど、その維持管理も大変です。

縄文時代には、東北地方でもイノシシが身近な動物でした。多くの土偶にレリーフとして残されていて、狩りの安全を祈る儀式に用いられたのかもしれませんが。九州から南西諸島では、猟師の儀礼の中に、イノシシの頭骨を火の神に捧げる風習が現在も残っています。また、巨大なイノシシは山の神の乗物である、という奄美大島の俗信は、かつては本州でも一般に信じられていたことが鎌倉時代の「吾妻鏡」の記述から知ることができます。



山際の農耕地に設けられた電気柵

ニホンジカ (ウシ目シカ科)



ニホンジカ (撮影：石原 誠)
 頭胴長：オス90～190cm、メス90～150cm。肩高：オス70～130cm、メス60～110cm。体重：オス50～130kg、メス25～80kg。
 常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、草原など多様だが、森林から完全には離れない。イネ科草本、木の葉、堅果、ササ類などを採食。出産期は5月下旬～7月上旬で通常1頭を出産。交尾期は9月下旬～11月。

日本に生息するシカは、北海道のエゾシカ、本州のホンシュウジカ、屋久島のヤクシカ、対馬のツシマジカなど、体の大きさや角の枝数は多少異なりますが、すべてニホンジカという種に含まれます。

ニホンジカは森林の間に草地が点在するような環境を好みます。草地には餌となる草本類が豊富にありますし、森林は住みかであり、木の芽や樹皮も餌となります。

●天竜川周辺での生息状況

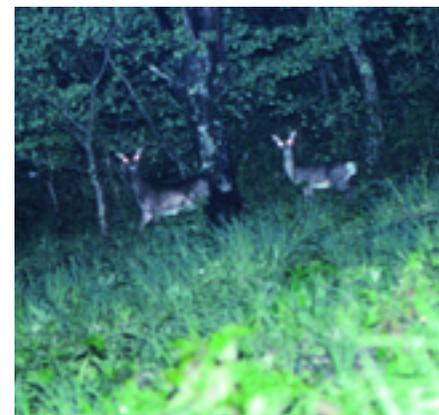
シカのような大型草食獣にとって、川は餌が豊富な環境であるばかりでなく、敵に追われたときに、臭いや足跡を消して敵を欺くための避難所でもあります。冬にはニホンジカの食べ物はきわめて少なくなりますが、水辺には冬でも青々とした草本がありますし、雪も比較的早く溶けます。

伊那谷では、以前は南アルプスとその山麓に生息し、天竜川の西側で



河原に残された足跡

は絶滅したと言われていました。しかし、近年、南アルプス山塊での個体数が増加傾向にあり、1980年代前半から天竜川に隣接する中川村（東側）の田畑での目撃数が増加し、1987年には天竜川西側の飯島町で確認されました。その後、徐々に段丘斜面林を中心に天竜川西側地域での分布を拡大していると言われます。今回の調査では、中川村や太田切川合流点近くの河川敷で足跡が見られました。



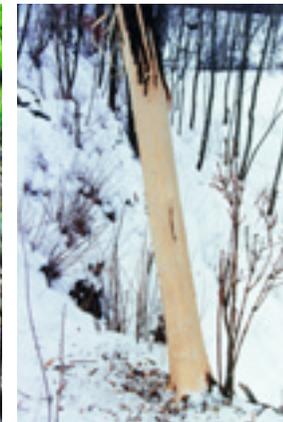
夜、林から出てきたニホンジカ

●雪に依存した個体数変動

ニホンジカのように長くて細い足をしている動物は、雪の中ではうまく歩くことができず、雪が苦手です。また、雪は食物である草本類を覆い隠してしまいます。そのため、山の中に住んでいるニホンジカは、冬には雪を避け、餌を求めて低山帯へと移動します。夏には比較的広範囲に均一に分布していますが、冬季には低山帯から山麓にかけて高密度に分布することになります。冬季の餌は、樹皮などが主体となるため、低山帯から山麓の森林では、あちこちで樹皮が剥がされた樹木が見られるようになります。冬は、ニホンジカの生活で最も厳しい季節であり、特に体力のない子鹿にとって最初の冬が生死を分けます。最近の例では、平成13年(2001)の冬の大雪で、山麓部での確認情報が目立って多くなり、また、多くの個体が餓死しました。ニホンジカの個体数は、大雪の冬には大きく減少し、雪の少ない暖冬が続くと増加していくというサイクルを繰り返しています。



ニホンジカに樹皮が剥がされた樹木



ニホンジカの食痕

●ニホンジカの個体数管理

近年、シカによる農林業被害が問題化し、個体数管理の必要性を求める声が高まっています。ここで言う個体数管理とは、生息密度を定期的に調査し、必要に応じてある頭数を調整する（撃つ）というものです。長野県のような山岳地では、冬季にニホンジカが低山帯から山麓部に集中しますので、降りてきた個体数を減らすことにより効果的に密度管理ができる可能性があります。しかし、大雪によりその地域の個体群が維持できないほど減少することも起こります。北海道や東北地方で明治時代に起こったシカの激減は狩猟と大雪が主要な原因でした。そこで、個体数管理をするにしても、定期的な生息密度調査は不可欠です。

森林伐採による草地面積の増加が個体数と関係しているといわれます。伐採規模を小さくし、造林地は防護柵を設置するなど、さまざまな方法を駆使して、農林業被害を減らす努力をしていくことが重要と思われれます。

●シカの利用と信仰

イノシシと同様に、シカは縄文時代より現代まで狩猟の対象とされてきた最も一般的な大型哺乳類です。食用以外にも、毛皮は敷物や馬具のほか狩猟用の袴、足袋などに、毛は筆に、なめした皮は紐、袋などに多用されました。また、骨は、銚・釣針・刺針・卜占に使われました。

角を持つ野獣は珍しく、その角が毎年落ちては再生することに大きな生命力を含むと考えたようです。体力を補うために、薬用としてその肉は食べられ、角は粉にして「鹿茸」の名前で強壮剤とされました。

一方で、角をもつその姿は特別な獣とも考えられ、神霊の乗りもの、神の使いとして保護の対象にもなりました。常陸の鹿島神社や大和の春日神社などでは、神の使いとして保護・飼育されてきました。また、「日本書紀」「古事記」には、重要な判断を要する事柄をシカの肩胛骨を焼いて、その割れ目の状態によって占う太古の儀式が古代に行われていたことが記されています。現代でも、一之宮貫先神社（群馬県）などで年占いとしてこの儀式が行われています。



ニホンジカの角こすり跡

コラム 昔は天竜川にも生息していた哺乳類

●カワウソ（ネコ目イタチ科）

カワウソは絶滅が危惧されている動物で、国の特別天然記念物に指定されています。日本にはかつて北海道から九州まで分布していました。現在、高知県南部にきわめて少数の個体が生息している可能性があると考えられますが、ほとんど絶滅的と思われれます。

天竜川にも生息し、カワウソを見たり、カワウソ猟をしたことのある人もいたようです。現在は絶滅して、その姿を見ることはできません。

カワウソは、毛皮をとるために昔は大量に捕獲されました。カワウソは餌の大半を魚に依存していますので、河川や海岸に沿ってしか分布しません。そのために、もともと個体数密度も低く、狩猟による捕獲圧をまともに受けってしまったのでしょう。また、水質汚濁による魚類の減少、農薬による魚介類の汚染、さらに河川の護岸工事や道路建設も、カワウソの餌と生息地を奪い、カワウソに決定的な打撃を与えたことでしょう。

昔は全国各地にふつうに見られた生き物が、姿を消してしまったことは、とても寂しいことです。再び天竜川にカワウソを呼び戻すことは、現在の状況では不可能と言うしかありません。



カワウソ (イラスト：藤原直子)
頭胴長70cm、尾長46cm、体重8kg。河川の中下流部から沿岸部に住む。水中で魚類、甲殻類を、陸上で野ネズミ類、鳥類を捕食。川岸に巣穴を掘る。

●カワネズミ (モグラ目トガリネズミ科)

カワネズミは「ネズミ」という名が付いていて、姿もネズミに似ていますが、モグラの仲間です。手足の指の両側に水掻き替わりの扁平な剛毛を持っているなど、水生生活への適応が見られます。ふだんは川虫などを食べていますが、水中を自在に泳ぐことができるので、音もなく忍者のように動き回りイワナの稚魚を捕らえることもあります。水中では体の毛の間に貯め込んだ空気が銀色に光って見えることから、釣り人から「銀ネズミ」と呼ばれたりもします。



カワネズミの生息環境